

第1回 岡崎の山車文化を探る

平成27年4月27日

1 山車とは・・・

(1) 山車の定義・語源は・・・

山車は、祭礼の際に曳いたり担いだりする出し物の総称。分類すると、山の形状を模したり、上に木を立てて山の象徴としたものを^{*}「山」。それらが無いものが「屋台」と分類される。

※本来の意味の残る稀有な例として、栃木県那須烏山市の「烏山の山あげ行事」(通称「山あげ祭」、国の重要無形民俗文化財 大山は幅7[㍎]、高さ10[㍎]以上、奥行100[㍎])がある。

山車の語源としては、諸説が入り交じっている。以下、幾つか紹介したい。

屋台の鉾につけた竹籠の編み残し部分を垂れ下げて出してあり、その部分を「だし」と言ったことに由来する。その他、神を招き寄せるために外に出しておくことから「出し物」とする説もある。

「山車」と書くのは当て字で、祭礼の時に、神の降りる「依代」として小さな山を作っていたものが発展し、移動可能な車となったことから当てられたと考えられる。関西では、「壇尻(だんじり)」、「山(やま)」という。

(2) 山車の名称

① 山のつくモノ

- ・ヤマ(山、山車)
- ・ヒキヤマ(曳山、曳き山)
- ・カキヤマ(舁き山、担ぎ山)
- ・ヤマホコ(山鉾)
- ・ヤマカサ(山笠)・・・九州北部

② 車のつくモノ

- ・ダンジリ(地車、台尻、壇尻、車楽、段尻)・・・関西が主
- ・サイシャ(祭車)・・・三重県桑名市
- ・オクルマ(御車)・・・知多、尾張地区

③ 笠のつくモノ

- ・カサボコ(笠鉾)・・・秩父

・オカサ（お笠）・・・和歌山県田辺市

④ 台のつくモノ

・ヤタイ（屋台・太鼓台）・・・主に長野県、静岡県、岐阜県など中部地方、および兵庫県播磨など）

（３） 山車の語源および原型

① 山車の語源は？

神殿や境内の外に出す出し物であるからとする説と依代である髯籠（ひげこ）を出しているからであるという説がある。そして、山車は「出し物」全般を指し、車の字がついていることから曳山を指すことが一般的である。

② 山車の原型は？

ヤマ（山）は自然の山岳を模して造られた依代で、祭礼などで用いられる。これが山車の原型であると理解されている。

民間信仰の世界では、カミ（神）はヤマの山頂や岩や木を依代として天から降臨するという考えがあり、山上や山麓に斎場を設け祭祀が行われていた。これらの信仰対象は、山岳信仰としてあるいはヤマを神体とする神社として残っている。代表的な例では、大神神社（三輪山）などがあげられる。岡崎でも磐座（いわくら）や神木を持つ神社が見られる。

ムラが発達すると平野部においても祭祀が行われるようになり、臨時の斎場が設けられた。この時にも降臨を仰ぐために依代を立てており、これが恒久化して現在の神社が存在する。この依代の一つに、山岳を模して造られたヤマ（山、造り山、飾り山）がある。

- ・「置き山」
- ・「曳き山」
- ・「舁き山」

２ 岡崎の山車の今

（１） 能見神明宮の大祭

① 大祭の歴史

この祭りの起源は、はっきりしない。しかし、江戸中期には始まったのではないかと考えられる。

・江戸時代中期（１７５０年頃）

「例祭六月十五日なり、山車車輛出す、氏子町中を引き渡す、童児の舞などあり、美観云わん方なし」（『参河国名勝志』より）

- ・明治10年代

神明宮の祭礼は旧6月15、16の両日と旧9月15、16日に執行

- ・明治20年代

明治20年（1887）より、春旧4月15、16日に変更。秋は変更無

- ・明治40年代

明治41年（1908）より、祭礼を新暦5月15、16日に変更。明治42年、松本町の山車（2階建て塗り仕上）が売り払われる。

- ・大正時代

大正4年（1915）、松本町では総檜白木造りの山車新造

- ・昭和初期～終戦

昭和27年（1952）、山車の引き回し16年振りに復活

- ・昭和28年～35年

能見中之切、能見北、元能見中、元能見南、松本が山車を新造

- ・昭和58年

「大年番制」から「当番制」へ移行

② 祭りの流れ

- ・会所開き（平成25年5月5日）

- ・大幟棹立て（平成25年5月5日）

- ・前日祭（平成25年5月11日）

- ◆小屋開き 8：00～

- ◆山車お祓い

- ◆前日祭 10：30～

- ◆乙女の舞

- ◆奉納花火 19：20～

- ・大祭（平成25年5月12日）

- ◆神輿渡御 8：00出発

- ◆本祭 12：00～

- ◆山車町曳 13：00～17：30

- ◆宮入 19：20出発

- ・終祭（平成25年5月13日）

- ◆終祭 15：00～

- ◆小屋終い 16：00～

- ・御神酒開き（平成25年5月18日）18：30～21：00

③ 祭り運営組織

- ・古くは、祭りのすべてを1町で取り仕切る大年番制

- ・11部門に分かれて運営（氏子町ごと受け持つ）

- ◆大年番、渡御部（次年番）、山車部（次々年番）、備品用具部、衣装部、境内

警備部、交通警備部、稚児・五色旗部、乙女舞部、余興部、厄年部

※【大年番＝総務部の役割。年間行事を取り仕切る。】

④ 各町の山車の特徴（単位： cm ）※町の前の数字は、平成27年の山車の順番

1 ◆材木2丁目

長：4800 幅：2800 高：3900

大正4年新造。山車天井に「大正四年乙卯年喜日畔溪」の墨絵の龍と彩色の花鳥画が描かれる。台輪：木製（ゴマ）

2 ◆松本町

長：4500 幅：3500 高：4350

初代の山車は江戸末のものと思われ、明治42年額田の檜山に売却。額田に売却した山車は、須賀神社庄野組の鳳凰車で、現存している。大正4年山車新造。現山車を昭和35年新造

3 ◆元能見中町

長：4300 幅：2300 高：3300

昭和28年、花車に山車枠取り付けし、現山車の原型とし昭和32年新造

4 ◆元能見南町

長：5800 幅：3200 高：3500

昭和33年新造。地元職人の手による。

5 ◆城北町・柿田町・元能見北町

長：4950 幅：2950 高：4100

順次山車曳を3町で行う。平成25年は柿田町、平成26年は元能見北が山車を曳いた。山車天井画の龍は岡田石嶺（明治19年生まれ）

6 ◆能見北之切

長：4000 幅：3000 高：3500

大正時代に上山撤去。彫刻のある壇箱裏面に「(略)／尾州名古屋／末廣町彫物師／瀬川治助／重定 花押／(略) 文政五年（1822）／壬午／六月吉日」とある。昭和31年保有山車をベースに新造

7 ◆能見中之切

長：5200 幅：3500 高：4300

昭和28年、総檜造り山車新造。旧幕使用。能中と刺繍された赤見返幕裏に「干時 元治元年（1864） 申子四月大吉日新調之」、側面腰水引幕は紺地に金糸銀糸で阿吽の獅子が刺繍されている。

8 ◆能見南之切

長：5500 幅：2800 高：4150

明治初年頃、半田（松塚町か？）より山車購入と伝承。大正6年単層とする。明治45年までは、上山があったつくりである。

(2) 矢作町2区・3区の山車

矢作神社の祭礼は、10月1・2日に秋祭りとして行われている。四つの祭り組には、山車があり、矢作神社の祭礼には仕組んで、マチ曳を競ったという。大正12年、岡崎街道に愛知電気鉄道が東岡崎まで路線を敷設するためガードを設置したので、東之切の山車は巡行不可能となり、知立に売られたという。次いで、上之切の白木造りの山車も、故あって、半田の奥津に売られていった。

現存する矢作の山車は、2輦となった。戦争末期に西中之切（3区）では、山車を戦災から守るため、分解した飾りを桜井寺に疎開した。胴柄（山）と車輪は公会堂に置いていたが、公会堂が焼け、同時に胴柄と車輪も焼失した。しかし、飾りは無事であったから、戦後、寄進により胴柄と車輪を新造し、以前の山車を復元することが出来たという。東中之切（2区）の山車は戦災にも合わず無事であった。

以下、西中之切（3区）山車の調査記録を記しておきたい。

◆ 山車の曳行記録

近世、近代についての曳行記録については、再度文献調査をしっかりとしなければならないと思う。

今回の聞き取り調査では、昭和19年以降の状況が確認できた。

- ① 昭和19年 額田桜井寺に飾り物等疎開・・・記念写真あり？
- ② 昭和20年 岡崎空襲 3区山車、胴山、車輪（ゴマ）焼失
- ③ 昭和25年 山車曳行
- ④ 昭和34年 山車庫完成
- ⑤ 昭和49年10月6日 山車曳行
- ⑥ 平成2年 平成天皇即位祝賀曳行 大棒長 鋤柄欣宥
- ⑦ 平成5年 山車曳行 大棒長 野村豊治
- ⑧ 平成22年 矢作3区山車保存会発足

10月2日 山車曳行 大棒長 若園勝輝

- ⑨ 平成25年 山車曳行 大棒長 金森誠也

曳行としては、かなり不定期で何年も空いてしまう場合が合見られる。平成22年には3区山車保存会が設立され、山車曳行に努力する方向で動き始めている。また、2区の保存会同士の連携も動き始めている。

◆ 山車の記録（墨書銘）

前山唐破風鬼板裏に以下の墨書が確認できた。

天保十歳

亥六月出来

惣頭領 材木町

大山庄八

彫刻師 名古屋

瀬河治助

木町 柴田又治郎

木地師

木町 菅駒治郎

太田源治郎

大山芳治郎

前惣塗師

西町 富士田和三郎

伊賀 加藤藤吾郎

山形塗師

横町 近藤清治郎

伊田 加納辰治郎

箔置師

連尺 内藤岩吉

木町 大山正女

太田喜代造

萬筆 小僧勘助

とあり、天保十年（1839）6月に完成したことをはっきりと裏付ける資料が確認できた。また、彫刻師は名古屋の瀬川（河と記載）治助（重定か重光）父子であることは、明らかである。また、脇障子彫物（左右対）の下隅に朱で「清川」の刻銘が認められた。これは、「きよかわ」でなく「せがわ」と読ませた、瀬川治助の「遊び心」と思われる。

この山車は、総頭領が岡崎城下材木町の大山庄八であり、彫り物師以下岡崎の職人集団で作りを上げていることを裏付ける貴重な史料でもある。

また、矢作2区（東中之切）の山車の墨書銘に「庚 天保拾壹歳 子六月吉祥日 吉野屋庄八作之 山ノ前 矢作 東之堺 若連中」と書かれているものが認められる。さらに、檀箱彫物の側面隅に「瀬川」の陽刻と「重光」の陰刻の印型彫が認められる。吉野屋庄八は、3区の大山庄八と同人物であろう。

これらからするとほぼ同時期に2区と3区の山車が完成したことになる。また、同じ名古屋の瀬川治助が関わって、材木町の大山庄八が岡崎の職人集団を束ねて、完成をしている。矢作地区の山車の再調査（総合調査）をする必要があると強く感じた。

◆ 山車の構造（単位：³/₄）

- ① 車輪（ゴマ） 松材 直径 900

厚さ 300

戦前の物は、戦災にて焼失。戦後作成。(3区新実広次氏の手作りと聞く)
この車輪は、塩漬け保管され、大事に使われてきた。

平成21年に車輪(ゴマ)の改造を行う。

集成材 直径 1000 (単位:ミリ)

厚さ 300

- ② 車軸 檜材
- ③ 台輪(車台) 松材 間口 2420 奥行 4140 妻台輪 平台輪
- ④ 骨組 樺材 山の最長時(総高) 6420
- ⑤ 梶棒 杉(檜材)
- ⑥ 前戸屋(御拝)
- ⑦ 上段
- ⑧ 屋根

この中で、前山の鬼板(楠木正成・正行親子の別れ)の止めの部分にもズレと歪が生じ、最近新たなビスで止められている。この鬼板の後ろの屋根も欠損している状況である。この屋根の下部分の板に龍の墨書が見られる。若者中という記載が見られた。下絵か落書きか判然としない。

上山は、屋根がないために損傷が激しい部分がかなり認められる。さらに軒垂木の庇先端の損傷が激しい。また、屋根がないためか野馳板の反りが見られる。さらに化粧野地版の乾燥・収縮等による剥がれが見られた。軒先庇部分(軒垂木)金箔の変色が見られる。

上山の唐破風は、全体的に金箔・漆・金具等の経年劣化が激しいように思える。

◆ 山車の飾り

- ① 正面・・・唐破風の二重屋根
破風 黒塗りに菊 桐の金具
- ② 上山中段・前戸屋・・・金銀の箔を押した鞠と戯れる獅子の親子
- ③ 鬼板・・・楠木正成・正行父子「桜井の別れ」
- ④ 懸魚・・・三羽の鳳凰
- ⑤ 欄間・・・池に龍が上下対に設えられている。
- ⑥ 伊達柱4本・・・竹に虎の透かし彫
- ⑦ 檀箱・・・見事な龍の彫物。左右には力神(力士像)が伊達柱を支えている。
- ⑧ 上段・・・黒塗りの丸柱。紅色の刎高欄。松と鶴を配した回り枠。四隅と中間6ヵ所の象形。獅子頭
- ⑨ 御簾

飾り物にも、経年劣化が随所に見られる。特に金箔の擦れ落ちが目立つ箇所が多い。また、エビ垂木受け、軒桁、妻虹梁などには、金箔の擦れ落ち、彫刻部

分の割れが目立つ状態である。さらに、金具の金箔の劣化が目立つ。前山檀箱の龍の歯のひび割れ、髭の鉄線の露出、一方の髭は、根元から欠落。前山懸魚の鶴の両足が欠落している状況である。前山鬼板（楠木正成・正行父子の別れ）松が麻ひもで固定されている。

以上のように状態としては、良好でないと判断せざるを得ない。上山の屋根の部分の復元も含めて早急に検討し、対策を講ずる必要があると思われる。

◆ 幕

① 天幕・・・上山屋根軒下の紫色の幕

② 青白幕・・・山車胴山と大幕の間に張る。

以下の人たちに寄進による青白幕

総 代 新実広次

昭和42年10月 副総代 酒井利輔

〃 澤田憲一

③ 大幕・・・山車の骨組みや囃子方を隠すため、山車の両側と後部を囲む猩猩緋色の緞帳。中央には白地の布で腹巻をし、前部で固定する。

④ 水引幕・・・大幕の上部に吊るす。山車の側面と後部の装飾。黒地に金糸・銀糸を用いて龍と波を縫い取り、目には玉を嵌め、爪に銀板を張る。

幕の状態は、上山、前山に比べれば状態は良好である。ただ、天幕、大幕、水引幕には、数か所のほころび等が見られるので、手当てをしておく必要がある。

◆ 山車曳行の実際

鋤柄欣宥さんに話を伺い、鋤柄さんが大棒長を務めた平成2年11月12日（月＝祝日・即位の礼の日）の実際を報告する。

① 曳行日時

平成2年11月12日 午前9時30分～午後3時30分

② 曳行経路

3区山車宿出発→旧道左折→2区消防庫前（反転）→旧道西進→4区神社前（反転）→島田屋菓子店右折[昼食]→国道1号線横断→矢作駅前（反転）→矢作タクシー右折→中道東進→八百美ストア（反転）→中道西進→キバナヤ洋品店右折→国道1号線横断→島田屋菓子店右折→旧道東進→彌五騰神社前左折→宿入り

③ 曳行役割及び人数並びに役職者名

・役割及び人数

大棒	大棒長以下	58名
山上係	班長以下	5名
山下係	班長以下	2名
	（作業者は大棒と兼務）	（15名）
引綱係	班長以下	6名

子供係	班長以下	17名
お囃子係	班長以下	8名
踊り係	班長以下	3名
		99名

・山車曳行役職者名

総務部長	野村直央	副部長	鈴木建作	池田茂男
会計部長	林 成晃	副部長	市川栄夫	
警備部長	鈴木 博	副部長	沢田恒之	福永正俊
接待部長	加藤清治	副部長	本多 勝	林 克彦

大棒長	鋤柄欣宥	副大棒長	左宗敏明	加藤 昭
大棒長補佐	三浦照男			
山上係班長	新実忠久	副班長	畔柳芳弘	
山下係班長	大山時二郎	副班長	赤坂正好	
引綱係班長	荒木宏文			
囃子係班長	野村喜三男	副班長	山下重信	
踊り係班長	鈴木健作			
子供係班長	山本記美江	副班長	細井秀子	青山ヒデ子

- ・大棒長 一世一代 山車曳行の全責任を負う。
- ・立切（たちきり） 車輪を地面から浮かせて、進行方向を90度または180度転換させること。
- ・山の上下 3段階に分かれている。資料3（山車法量図）参照
- ・曲場 山車が曲がる場所
- ・手踊り場所 9ヵ所（2区消防庫前、野村文具店前、彌五騰神社前、ますや雑貨店前、4区神社前、島田屋菓子店前、矢作駅前、佐野不動産事務所前、八百美ストア前）で行う。山車の前に10畳ほどの筵を敷き、その上で踊る。手踊りの際には、山を上段に上げ、踊り終了後は中段に下げ進行する。

④ 祭り囃子

六法、神車、七草、大拍子、車切、夜神楽が状況に合わせて演奏される。鳴り物は、大太鼓1、小太鼓2、鼓1、笛2～3、三味線1～2、鉦1などである。

東中之切（2区）の山車の構造や飾りも3区の山車とほとんど同様であるが、上屋根が上下に自由に動き、山の高さは上げた時7尺9寸、下げた時は6尺となった。また、前戸屋の鬼板の彫刻は牛若丸と天狗であり、地元に伝わる浄瑠璃姫と牛若丸の物語にちなむものである。

(3) 檜山須賀神社祭礼

① 概要

須賀神社の春の大祭は、「檜山の山車祭り」と呼ばれ、須賀神社から神明宮への神輿渡御に合わせて5輦の山車を組ごとに巡行する。山車の上では、お囃子が奏される。神明宮に到着後、「御照覧」として年番の2組による祭囃子が奉納され、夕刻には須賀神社へ帰着となる。

② 祭礼組織

氏子は6組で構成され、2組で3年ごとに年番を務める。山車組は血族関係を重視している。

③ 山車および囃子の特色（明治26年火災焼失）

- ◆原組・・・竜神山車
- ◆庄野組・・・鳳凰山車（能見より購入したと伝える）
- ◆仲組・・・恵比寿山車（能見より購入したと伝える）
- ◆新居野組・新若丸
- ◆河瀬・宮北市組（花組）・・・花車（チャラボコ車）

(4) 本宿町祇園祭り

7月第4土曜日に行われる祇園祭りに、4輦の山車が出て、とても賑わいを盛り上げている。栄町が昭和10年に山車を造り、町内を巡行するようになり、戦後、西町や中町、東町も山車を造り、祭りを盛り上げていった。

補足

2-(1)-④「各町の山車の特徴」で紹介している山車の寸法について

平成 28 年 3 月に統一基準で計測。以後、次の数値を各町公式とする。

■ 能見神明宮各町 山車の規模

[長さ(梶棒を出した時)・幅・高さは最大値、重量も補記]

町名	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重量 (kg)
材木二丁目	560	260	400	700
松本町	460	340	460	1, 100
元能見中町	550	260	365	1, 100
元能見南町	570	260	365	1, 200
城北町・柿田町・元能見北町	575	405	390	1, 400
能見北之切	570	310	400	900
能見中之切	540	340	430	1, 200
能見南之切	550	280	440	2, 200

写真資料



能見神明宮山車マチ曳





手踊り



能見南之切見返幕



会所開き



おひねり（花）





山車マチ曳一矢作 3 区（西中之切）一



山車蔵（庫）一矢作 3 区山車一



矢作2区（東中之切）山車

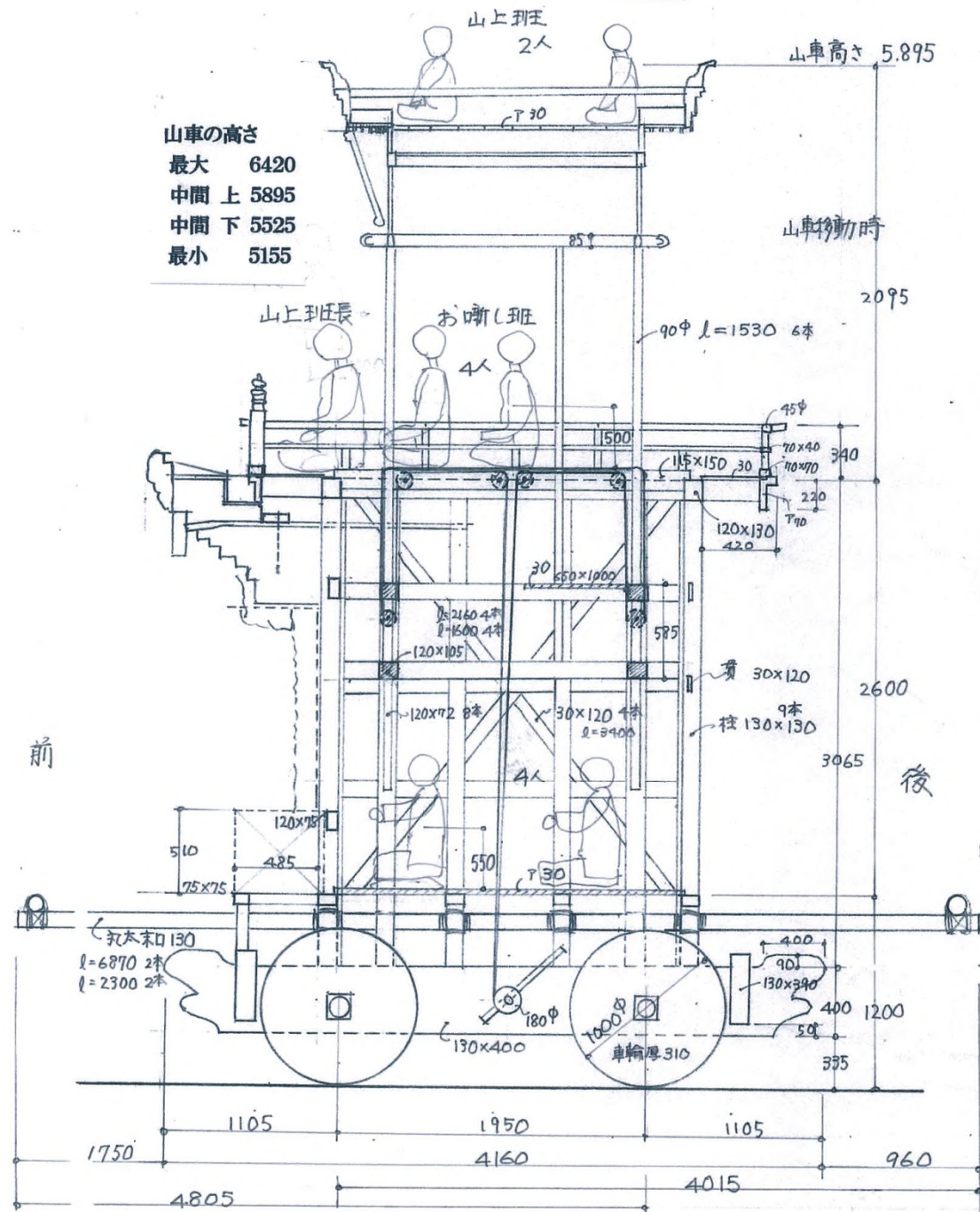


矢作2区・3区山車揃踏み

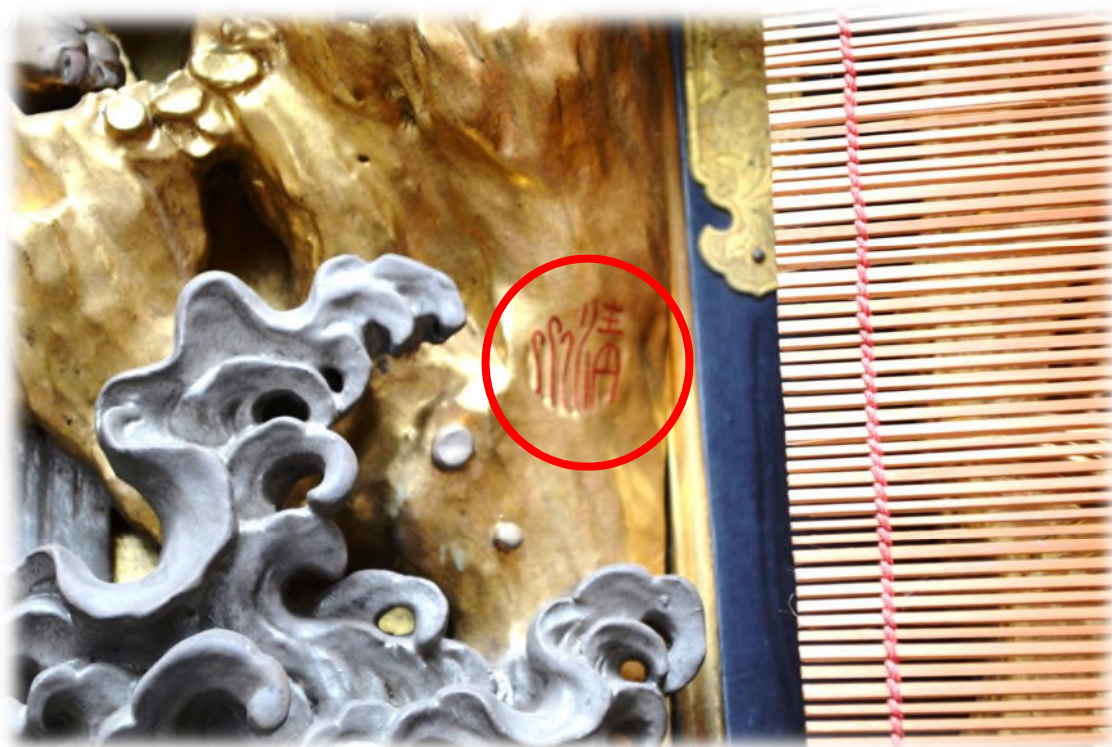


戦後作った車輪

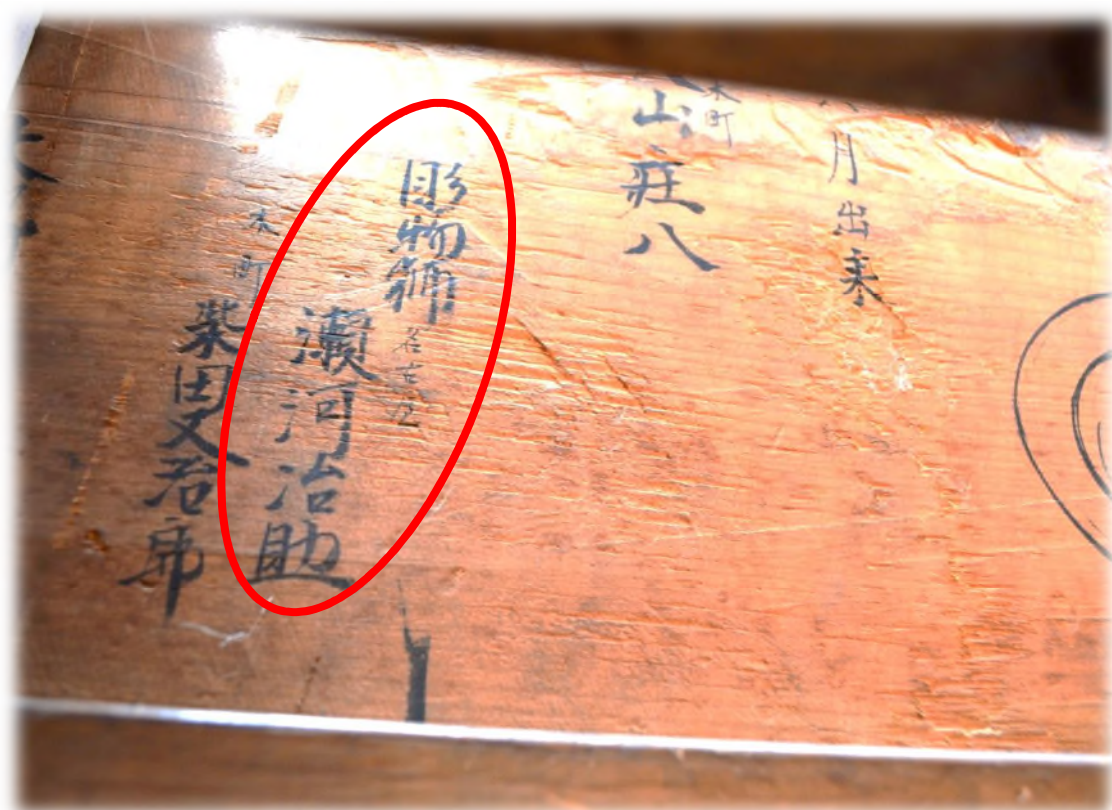
山車 荷重算定用断面図 縮尺:1/30



矢作3区(西中之切) 山車実測図



清川（瀬川）治助の朱印型銘一矢作 3 区山車一



彫物師 名古屋 瀬（清）河（川）治助一矢作 3 区山車一



天保10年6月 惣頭領材木町大山庄八—矢作3区山車一



矢作2区水引幕 奥村石蘭画



須賀神社山車渡御



マチ曳



花組 花車（チャラボコ）



御照覧



宮入